



本清

イモ

門遠13

號973

卷2

安部仲磨 生死流轉 輪廻物語卷之二

養老滝の由来 安部好根不爰の事

新説本朝小仲麻呂唐の後連年天下太平小上下和睡の折今

美濃國愛宕郡の農父等寧樂の都小許ひ

我國多度山とや如旧年より樹木生茂と殊小山深くは故土地

の推木夫とも日々山中小尋入く木を伐り薪を採り是と産葉小仕はぬ數

多ある其の中小佐治とや者正直律免の生を中々當年七十小及

ふ父を養ひ平生孝心才一少しも逆らふ意なく介抱して一孝あり

此老父いづる過去前生の業因少や年々小酒を好む今八朝夕の食

の糧小酒を好むとよく養食をいふも病苦を言ふも身をまはさず今小絶

明徳三年

海内切書卷二

へんくろの貧苦の中より怠りなく山へ入る薪を採り市に出る賣代
 なく直小酒を沽ゆりて父の養なひと為し固より窮民の事
 折火酒を之しくして父の痛苦を見る小堪びと神明佛壇小新念
 しも怠慢なるとしと感ぜぬのハハと然るに一日山深く尋入る小
 なく身体疲倦と斧振おも心小まらせむ日西山小傾く頃い
 薪も得ざるばかりして酒も求ぐ又や父のこるしみを助るのた
 をいぐまをと思ひつゆんとせし其折も斧甚た酒の匂ひ臭と穿
 つが如くある小堪いりつふとあうととま六正しく山の半腹
 布ぞありな小佐治且驚且怪乎中小掬ひて味をひきまは
 酒なりつる小深く怪しと思ひなれども父小よひん等の妹く
 瓢を納め身のつるもあつととていなきあつて我宿へをゆりつ

ほどは父の病床より這出てとくく一盃飲み終る是や延命長壽
 の美酒金茎甘露小優まる味ひ父が為小妓扇の良茶沈疴言ら
 愈るは似るもととて涙小垂びなれ小佐治も其小涙小咽び且神明の
 感應ありんとそとる日毎は彼山の瀑布小至りて酒と汲父を養ひ介
 抱するも近村近郷奇ありして土地の人民集會し我もくと彼瀑水と
 汲来ると見れば皆水ありあつと不測の事之存し御祈ひつと謹て述
 々るに吾人親王南召て早速奏聞を遂るもこれ帝甚と感感あり孝
 百行の本にして天地と感動するやの事あつと斯る天瑞の蹟り
 こと同九月下旬多度山は御幸ありて孝子小佐治小田園多く賜
 老と養ふの境なれとて養老滝と号し還幸の後養老元年と改
 元しぬ斯る嘉瑞の重あるも先年入唐せし阿部仲磨蓋貫内傳の

一巻は元来もつた吉孔あんと帝は始奉て未々の人とも今や飯朝明
 やゆふと待り其後便もなく元より大支の勅命と蒙りたる身の上を
 るよ是より遅滞不及ふ深き子細の有らんと叡慮覺束あつ折
 りや大和唐土昔も今も人小秀でたる者の必も人小悪やう習ひ兼
 て仲唐の英才と心小悪む諛諛の官々能く時着るや思ひらん詞を
 揃ひて下さるる既小仲唐唐土へ暑後一度の書翰は越せしもの
 其後絶て左右あつ渠元来已も智ある小すせて兼く唐土の
 廣くを慕ひ我日本を小国なりと賤む由唐帝より彼が弁舌小誑
 うさ漢土小はえと有が故小再び飯朝の思ひを断え唐帝小は女嬬ら
 ひ官位次第小昇進して秘書監小至り檢校小移り左補闕於歷
 名も改て朝衡と号し安南國の都護として左散騎常侍北海の関

國公たるの旨我々委細に外の便を以て羨むと古と振とりさるれ
 へ聰明の君よりあがらるる女帝に在るは史記に御疑ひ記らせ
 らる何とぞ大宮の御沙汰よりうらぬは是非もなれ斯る折是仲唐
 の留守と守る兄の好根始に我身の非を悔て大切守らるる誰云
 とあ仲唐の唐小留るも又死せしも街祝世評區々なまは好根本来
 の悪念起り此家の元我知むご家あるを父報守弟の仲唐のこを愛せ
 らるて我が家嫡小有あつ家事もあるは遺憾小こ思ひ小
 所詮此度仲唐の飯朝せまの風説こそ我南運の時節到来幸ひ
 仲唐妻艶色あつ國中手押の花と詠め満月のごと初年あつ此の
 兎も角もたつめ若又無益の美理達し我言後其の女子手短の
 小殺害して心の隨に押領せんを誰る此判の有べと慳貪邪見の悪



安倍好根好悪
満月丸と討人
とるる因



軒延少話卷二

念の胸小包も面を色成合て度々小戯り口説と中々鉄膽石腸の
 貞烈心たゞ且暮小仲磨と十里の外小恋慕え好報の尚も疎増の思
 ひの胸も室まうて踏迷ひあゝ恋路の闇の夜家士も己小寐静やうと四
 更の鐘の響く頃手小刀成提げて思ひつめう無体の恋慕四方小
 心奥の間の燈火細き屏風の内ふそと惹ひ入揺り起し心の長の千万
 無量否欲應欲の返答次第覺悟の疾よと極めしと退引あぬ一言
 小憫もそ言もあうりうが稍あうて恨めしげな嫂水小濁る時手を以て
 援多しとへりも知らうあうりあうり況や其の身嫁教戒然して無給
 りん非道の仰ぞ心得ね抑父君の御最期迄も勸氣救つさる兄君を
 夫仲磨親兄の礼と重く兎角して呼戻したる同胞の義理とと思
 召給のむや且去年勅命の重た大任と冠して親と夫婦の生別離

思ひ小餘る自らを深躍らしくも恋慕と人小非ざる御心と或の歎と
 又耻しめ靡く氣をこのあうりあうり好根の暫く低頭むと黙然として
 居らうしが漸く小首と擧て兄弟の義理世間の大道其許の異見と
 待どして我又とくよと弁ひやそ是故小を此年月を以の胸に陸奥の
 思ふも色小頭もく物や思を教同向りて事もあうり思ふ
 の深き賢身の事と思え浅後や人面狗心の所行をさし人も出さ
 幾度か我を我身戒めり忘れんと思ふ生増小尚も思ひし悲
 義心ツツ包れども積りくくつや四百余病の名小潤きし恋の病乃一
 症の塵に人言一言の故披扁鵲の奇方小優る業とありひも無情と
 今の一言小良業変じて毒食つて四やで識る大悪心所領の敵恋の仇身
 仲磨と討く棄て我も免せんと思へども千里隔て唐国へ行事と

てもあつては親子いえうと同一体不便かたうも満月と只一刀小刺殺
 御身も害し我も又返さ刀小腹切心得うやばる刀の柄小羊を掛
 つ。睨む眼の腫も正し声振りて云々流石女の胸狭く君や我子小
 怪我わらふ夫へ對し言談の有と有ぬ免すれ角すも其悲しきを奈は
 せん一と先地場を宥あさき別と思慮を極めんと胸を沈め好恨は向
 ひ滅は殺あぬ賤毒と斯す思召らるる愚い思ふと此程情あ
 くもて方せし御心の底の知さる故に夫仲唐渡唐の後終る音信あ
 らざり再びゆえに存せむ便ら方あれ我々母子今の仰小遠ひあ
 行来見捨るる女は已と愛らる者の為る答と粧ると中ら命は代り朝
 夕ははひあせ御恩を送らん必と疑ひるひねと波合たる艶色ハ惱め
 西施泣る虞氏咲乱るる櫻桃の花乃雨中小のるに似たる好恨大

小まひて三人四人の生死存亡其許の心つたを能も利室は弁ひく
 兼引うへ何と恨んささ階老同究の連理の衣入るひと既に
 つまやくせあんとせしと逃る道もなく進退は窮や折もこそ
 わさ報曉の鐘は好恨あつて仰天一問へぞ満月丸一声高く咳
 せし母の苦悩を救らん為救母も怖る駭さし体よりては御近く好
 根が耳小口と寄で積る思ひの数々も憚の関と奈せん明夜は必と
 三更の鐘を相圖ふ人志まきと忍び来せと私語大悪無道の心も恋
 の時嬉し人目を忍び憚りて虎尾春氷を踏とくさくは抜足
 席下傳ひまゆりぞ可笑れも斯と好恨へ明る夜の深くと待と忍
 ひく積る思ひを晴さんと思ひの外ある今夜の裏十分は脱捨切く早
 事これ自害の体是はいつと邊をさす詔とば二通の遺書其

一通の好根の名宛さく、披き読見するま命と棄し上の恋の恨を晴さ
 きて満月の事頼入と死する最期の際迄も我子と思ふ恩愛は終事
 残せし心中と露不便も思ひなる放逸無慚の高笑ひ扱もく偏窟
 なる女の腸我其方よ恋慕も云も実の地家を押領せん其下工と知じ
 て非業よ死せし思痴さよとやど可愛き満月と我預らんいふあま
 ば程あく跡よる追馳させん死出の山路のさうさうて我子の来ると待
 受ると猛く罨さるまの下よると叔父もさる母の仇逃し心とと満月九小
 暇かぐらも刀勢をけり切掛あへ心ゆると同じく肉りと技合せ叔姪と
 ぐひは後らむ方らと火花を散りて切結びし折しも数々の家士郎
 等此物音に驚き我あくと馳着る好根も今の叶いと烈しく
 討込む満月が刀の下を引外し掻くると遙小飛退る庭の切戸を

蹴破りて雲霞霞と闇紛と跡と晦は逃失く明朝禁黨の糺
 明所へ訴えらる折節禁廷の首尾よろらざる時其あま叔父の
 非道母の自殺皆是仲磨が平生より家の齊くさるやうらさる故ん
 とて仲磨が辰朝迄の所領庄園召上らるこそ是非なきも満月九の
 悲歎の涙新腸の思ひして死別せし母の遺尸の夜半一斤の烟とほ
 生別せし父君と恋へど及ぬ千里の空帛等奴婢は暇遣く先祖
 相傳住馴し三笠の麓春日野を後に見かして定かき客路の霧
 は猶迷ふ年ハ僅は十二支のやと十五は満されも其名はまては満月の
 満を六鉄る安部家の微運を夜をなうけるものもなま
 吉備氏入唐 安禄山奸計の事
 光陰矢の如く春と過夏と暮る秋の半にあうらうら安部仲磨

飯朝の沙汰善悪ともに知ざるべ再び吉備大臣を以て入唐の旨を言
 仰出され同年八月廿三日都を發駕ありて肥洲唐津より東航ありて
 この途より津々駈々道中配符小至りて去去年仲磨入唐の刺しあり
 又嚴重小命せらる。たまた吉備公の館より一家の餞別他門の見舞宵
 の間乃賑ゆるも夜も深人も退れど寂莫あり座鋪の中吉備公の
 寢もゆくと孤燈の下閑坐して只独りつくと遠小漠土のめぢやふ
 小前遣唐使安部仲磨のしる便宜の有ざる王器破け易く喬木
 類も易に理と定て死せし小疑ひありとあひくも明日のや我
 身の上るたよりし心細くもあきまじし頃も秋の半そく山月老り我
 増し松風音冷しく尾花葛花露滋た萩の籬を推かき出され
 去去年齡十二ある小童の惣身水も老得まじし身衣をけし小

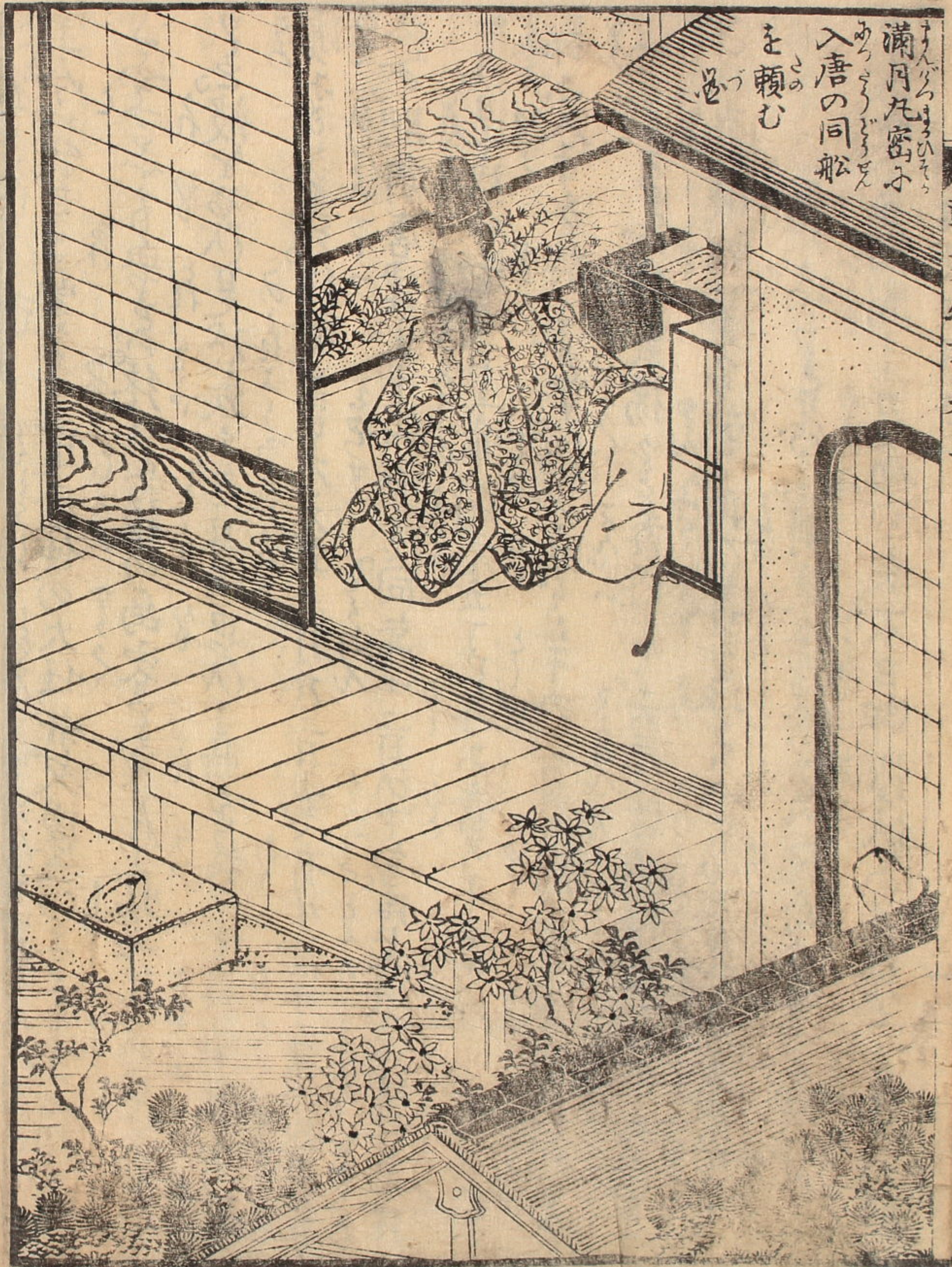
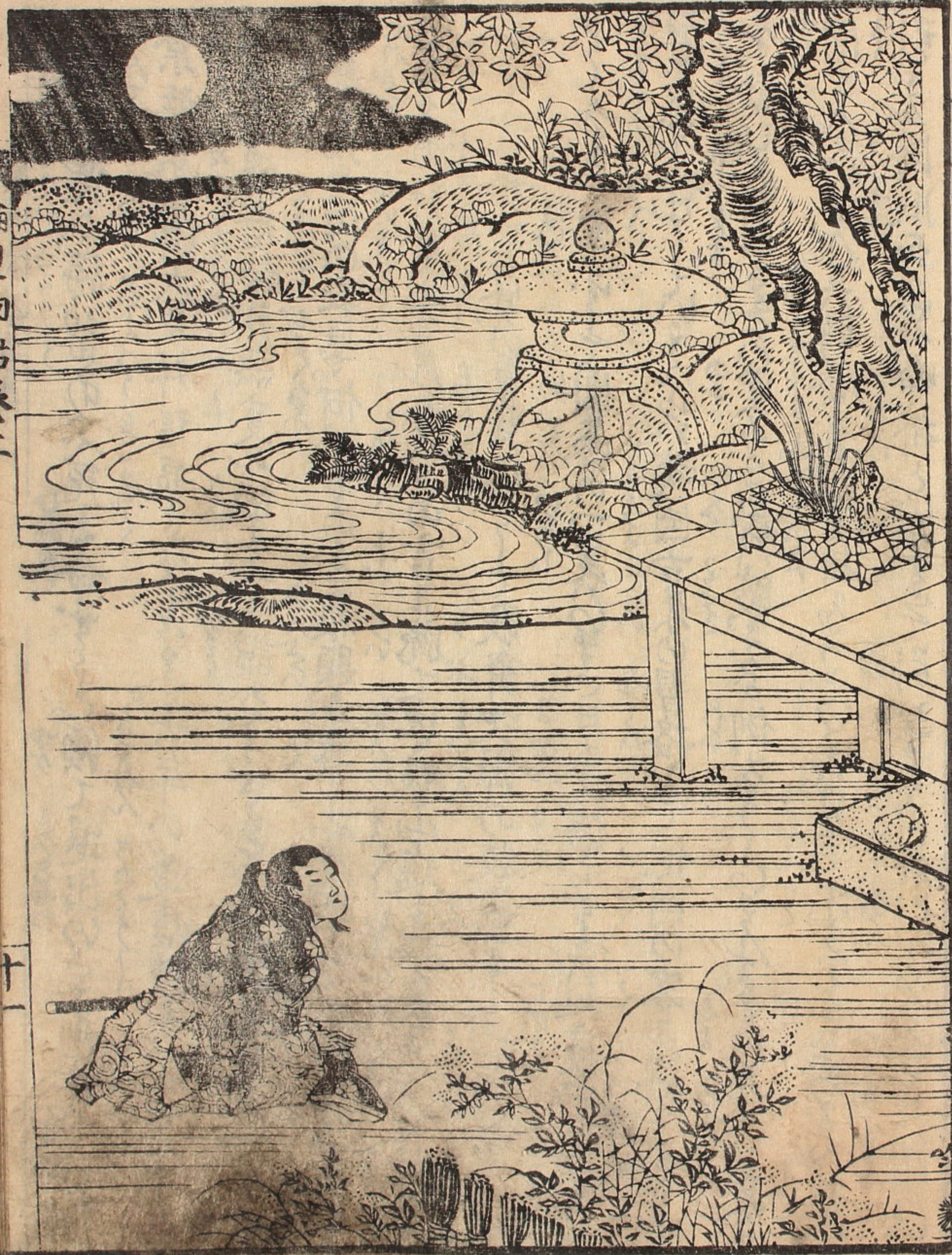
我會を願ひあけけりつぐり士備公大に敬らるひ汝何者あれが
 小夜更く我庭上りまび入りや不審さそと向ふ小童泪ははり
 流し御不審に充某美小前遣唐使安部仲磨が子満月とり者
 あり扱も我父去年の冬重き勅命が蒙りて唐へ渡りぬる留守
 の間伯父好根の不義に依り負節をまゝ母の自害母旨朝廷へ
 訴へし小却て重に御咎を蒙り父故朝の時せり所領庄園召
 上らる遂に流浪の身とありて僅に家士の情に依り身命が繫
 だし此度君又勅命に依り近日御発駕の田兼あるとひとく何
 事御供ふ召連らる別をい父と對面せん御歌の為ありても
 賤し形容を悔りて誰取次人も無き新之果がと命小代り御
 泉水の覓の桶より御咎をもらひとて是を以て忍び入ひなり誠小父

夫の生別を母が死して別する世も便あると某と憐れ不便と思召し
 今般入唐の御供の人数を加へるが生々世々の御厚恩願をなす
 地は平伏して泣沈むまじ備ふも共の涙ふまじ叔の仲磨の賢息
 満月あてあてしや。世頃貴家の駿執も。兼く委しく兼多の伴道も
 あく御同伴し。尊父へ對面してさそひ某もその覺束あは外
 国の御使し。成りゆ中んと薄氷を踏が如く。好まざるは御同
 船申さん。寂早配符の人数分。先般より驛路舟宿も付私
 ちぬ遣唐使の事あれ。遺懐あがら心度下るせやまじ。此理と能聞
 召分らまじ。若書通ても送らぬ。某彼国は持来し。頓て尊父は
 相達し。尚も未曲御物語と下述不日出度は同船あて。故朝しさん。
 そまやうての幾重も困苦残凌がも。とも香もある。二陽の春乃来を

待あんと。世も染りたり。満月丸の兼く。ゆもあらん。認
 置一通。母の遺書と封合せ。口備公の前も置置て。叔せひあはれ
 の薄命。のりもゆん。兼て。此一通。憐れ多れ。父は對面
 乃真初。何卒渡り。涙もれ。兼く。取上る。北
 堂の遺書に封じ。入の黒髪。此の。是下の書筒血も
 て書し。何あ子細。あは。満月涙。も生。死の。定
 う。父の行儀を尋ねん。三十里の海。隔つる。親子の血筋。も
 父の手。入る。も。叔。血文。認。孝心。切。形勢。口備。公。不
 とん。感。堪。も。思。ひ。出。せ。往。昔。漢。土。江。南。の。地。は。
 青。趺。の。虫。あ。る。形。蟬。も。似。く。せ。世。虫。兼。小。子。成。生。ま。天。皇。の。子。に。似
 ころ。人。身。か。ら。て。斬。あ。け。母。虫。尋。ま。る。を。と。る。血。を。絞。り。八十。の。錢

小塗う。又子の血をまがけて同く八十一の銭を塗る。重振物もとめん。お
 むふ。と。母虫の血を塗る。銭をうと。市小出。と。物相ひ。故。時。母子
 一体の愛念。心。あま。で。銭。も。亦。その。夜。の。う。ら。ま。び。く。も。あ。り。飛。解。て。銭
 の。盡。う。と。い。恨。う。あ。く。是。疾。子。母。銭。の。術。と。号。づ。け。て。遂。出。六。留。貴。自。在
 なる。と。今。今。の。血。文。の。一。通。の。父。子。一。体。の。血。脈。な。ま。び。三。千。里。の。耳。目。の
 間。假。令。大。千。世。界。を。隔。つ。と。も。巡。り。逢。ぶ。る。の。あ。ん。や。や。あ。ひ。く。短。慮
 小。身。が。傷。ら。せ。父。子。再。會。の。時。と。待。ま。う。と。他。事。な。ま。異。見。る。満。月
 丸。も。未。頼。母。死。心。地。の。般。勤。の。礼。謝。を。述。て。世。間。憚。る。日。蔭。の。身。を
 も。と。来。し。路。を。う。り。立。故。う。ぬ。吉。備。大。臣。お。り。ま。も。不。覺。見。の。涙。を。咽。び。つ。実
 小。及。子。の。情。の。天。性。を。う。つ。く。ま。で。恋。う。仲。磨。の。若。や。無。き。人。の。教。み。入。る。が。
 跡。は。残。り。満。月。の。心。の。中。の。い。つ。あ。ん。其。非。や。ま。の。数。々。も。取。日。人。の。身。の

上。今。の。我。身。も。蒙。り。遣。唐。使。の。大。任。我。又。漢。王。の。王。と。な。る。が。跡。は。い
 子。子。も。も。無。き。が。終。の。無。縁。の。幽。客。と。あ。ん。ん。持。て。死。り。の。子。あ。り。あ
 己。と。彼。と。あ。り。是。は。汝。と。無。量。の。思。ひ。の。時。を。接。して。難。鳴。曉。を。告。る
 頃。あ。り。あ。り。維。時。養。老。元。年。八。月。廿。二。日。有。り。寧。樂。の。都。と。首
 途。の。肥。前。唐。津。と。も。出。船。して。同。年。十。二。月。の。下。旬。唐。王。風。渡。津。に。着。岸
 せ。り。是。唐。の。玄。宗。自。皇。帝。開。元。五。丁。巳。年。小。當。り。し。と。斯。く。年。の。内。の
 都。小。入。り。を。許。さ。ま。と。漸。く。明。の。年。の。正。月。に。到。り。て。帝。の。拜。顔。を
 許。さ。ま。り。威。氣。揚。々。と。奏。内。して。去。年。遣。唐。使。安。部。仲。磨。に。よ
 り。日本。へ。假。朝。せ。ら。る。が。故。り。再。び。其。集。を。以。て。金。鳥。玉。免。集。を。懸。念。ま。す。と
 勅。命。の。赴。任。述。ら。る。る。は。前。遣。唐。使。の。り。免。角。の。噂。し。あ。り。只。日
 本。の。聖。王。委。細。問。し。召。届。あ。ま。不。日。御。沙。汰。あ。る。と。先。を。れ。道



満月丸密ふ
入唐の同船
を頼む

車道物語卷三

鴻芦誰の滞留ある命せむと頓て退出の言まざる其後
 禁廷の公卿大臣奸狡區々なるも去年の遣唐使を害せり
 此度の遣唐使亦無事不敏と謂ふこと罪あり者や
 小殺せんも国の耻辱何れありあは難題小事とせし明ら小殺害せん
 見事一の計策あると人々の言はれて安祿山進出爰は二ツの妙計
 ある我邦聖賢の書成始として歌舞吹彈の技藝や已に彼國へ渡
 りてあまて華小して國其客の一度の日本へ渡らざる此度士口備の
 餐應子死していん少の我國古来の習格として他国の客の心を圍基
 を勸む若圍さる望めり果成渡らる例ありといふは書を成す
 圍中といふ其時勝負の首掛ありといふ日本元と爰はつう後へ
 引ざる國風あり命掛といふ言を引かせり若引とある言成用ひ

して籠蓋内傳於辞と道あり是一箇兩得の計畧なり外
 手段の有ふらと弁を振るとさるれば揚國忠大を悦びをさるつ死
 爰も奇妙の人とそあも推測の去東の當時弁代の圍基の名基こ
 り成歎手して圍せあり恰も般也と以て難即と打解くも易うか
 んと手を取如くやとさるる諸士同一勇を共む急が去東と日出され
 曲され仰付られ抑此去東といふは性篤実正直ふして万支は鈍と生れ
 なまど基と圍とと妙とたう其故は彼が妻を隆昌女とて今年止へ
 盛ういふし過さるる其妾の嬋妍とらるる万人も勝るて美しく其上
 制發明あり幼稚の時より學問の道志し坐うら天文地理考え
 深く六韜二畧に通じて未央官を身を程り韓信が智の淺き成災
 ひ天漢再興の為世間に出て遂に其事を果さる孔明が計の理を

嘲ふ。誠希有の婦人あり。夫とて。嬰兒の母。莫く如く。東が魯鈍。あつ子を笑止。甲のせめて。のり。人々。圍基の道。教へん。既に。先年安祿山。逆の企。つた。隆昌女。が。聞知。是を。方。軍師。よ。せ。色。と。赤。泰。と。し。せ。度。の。教。通。の。艶。書。を。贈。う。し。ま。さ。い。も。富貴。も。推柄。も。蕭。を。屈。せ。ね。負。操。も。返。事。之。有。され。口。惜。か。ら。せん。方。あ。折。を見。合。世。地。意。趣。を。暗。さん。と。そ。ひ。と。そ。然。は。其。度。去。東。を。白。帝。と。し。火。急。の。御。召。何。事。中。ん。と。ゆ。の。遅。れ。を。待。暮。し。う。誰。彼。時。去。東。の。あ。り。帰。り。来。り。て。叔。今。日。の。御。用。に。そ。其。基。を。と。毀。ま。さ。せ。上。も。あ。れ。吉。瑞。之。其。故。の。地。度。日。本。より。遣。唐。使。来。着。し。就。是。を。教。へ。ん。が。為。し。命。掛。の。圍。基。を。殺。く。去。東。を。當。時。あ。び。を。死。名。手。の。首。と。く。よ。と。敵。陣。達。ま。の。間。謹。で。敵。手。と。え。れ。音。雅。有。勅。命。之。料。も。圍。基。の。あ。の。を。日。本。

へ。渡。り。し。四。目。殺。も。知。り。ま。す。革。三。才。の。小。兒。の。戲。を。打。勝。ん。手。理。有。之。心。安。ら。言。な。れ。隆。昌。女。の。惘。然。と。し。暫。し。さ。う。も。わ。れ。居。る。が。稍。お。ろ。そ。頭。を。擧。我。夫。の。高。基。言。敵。陣。は。達。し。て。大。切。の。御。用。を。来。し。る。身。の。面。目。と。い。ひ。あ。ら。う。命。掛。の。勝。負。と。世。は。類。あ。ら。太。直。之。小。敵。と。見。て。侮。え。ん。と。兵。書。の。教。え。殊。は。日。本。小。田。と。な。せ。し。も。神。力。加。護。の。国。と。あ。れ。ば。い。ろ。あ。の。神。姿。不。測。を。以。て。本。国。の。人。守。守。と。い。ひ。若。し。我。夫。一。目。よ。て。も。渠。が。為。し。負。あ。り。忽。命。を。失。ひ。ぬ。ん。斯。う。大。直。を。聞。し。ら。は。是。迄。教。え。進。り。せ。ぬ。極。秘。を。不。殘。傳。授。せん。尚。も。先。祖。の。宗。廟。を。祈。り。何。卒。首。尾。も。勝。へ。死。様。心。して。過。う。あ。い。を。假。令。勝。う。と。も。人。を。殺。す。の。凶。直。あ。る。所。定。て。是。が。安。祿。山。揚。国。忠。孝。の。倭。人。が。喋。り。合。せ。し。る。あ。ん。毒。と。く。は。知。あ。ら。ば。何。様。の。辞。退。き。斯。う。迷。惑。の。為。す。た。め。と。涙。を。流。し。て。言。な。れ。ば。去。東。初。め。て。心。つ。た。

後悔まれば今せんあく只地上の團基の極秘残るれあく傳へ得てこの
むろのあはれさまで晴の勝負も打勝て當里の眉目せんりのと師身の
れやう夫妻の睡ひ奥の閑室に相携て人知まづこを入ふなる

仲磨冥を顔りと 附 吉備氏夢に團基の道と悟る度

却就吉備大臣へ今日禁廷を退出して鴻芦館に到りてよ蕪てよ下知
や有うけん養應の官人山海の珍味以て馳走奪走大方あはれ上と下
へと動揺めたしも己は制限も成れば頼る人々暇を告夜も深くと更
闌し小吉備も唯一人眠らんまれば寝度う旅寝の夢の覺ゆもく四更
と報る遠寺の鐘はいと無常を觀下く仲磨の生死存亡今も左右の知
ざる我身の上の行末いふ成行事中んと思ふ折昔燈臺の傍に誰と
い知をも人有く恨我折るが如くれば吉備公のうと起上りて抑汝何あ

者ぞ身不肖あがく其れ大日本の神の御末の重た命を蒙つて遠く異
邦に來りて者汝が如き妖怪も駭くもの有べん其れ所早く去去さか
くば目も物も存んぞと己は御佩刀を手持掛あへ彼者さしちり声を揚や
と吉備公も毛もろのいれ我れと妖怪変化も非と見見と不審暗と
まじと何と怒り特衣の其隻袖飛出さるま吉備公心も怪とあがら手小
受く見えぬへはあはれいふ血泣と以て天の原つらまければ春日あはれ
三笠山より出づる厚くもといもいみじく書さるゆふくもれ仲磨の
手跡ゆえ初と渠が形容を見れば顔色青まの瘦がまて昔は替る面
影の腫まるとく頬骨高く髯左右方へ生分つて疑ひも死安部仲磨
あて有るく吉備大臣も驚れぬの扱に我推量の如く己は世に亡れた人
成じ思ひを速ん便あく我まうと事に假り安と願せし子細と言

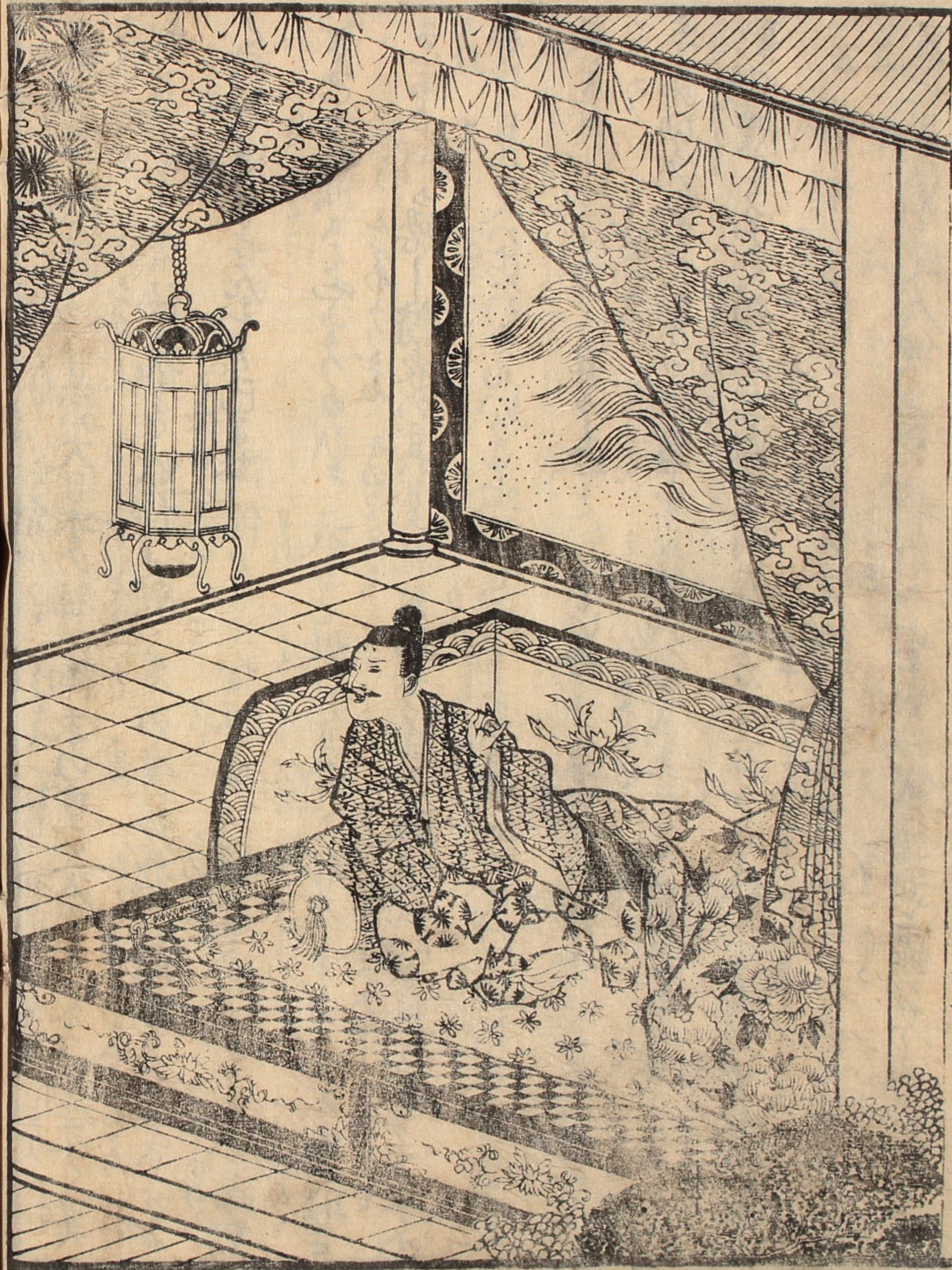
吉備公
仲磨
と
危難
と
生
る
を



仲磨
と
危難
と
生
る
を

吉備公

十五



軒
更
妙
話
卷
二

二十四

ん為あぐ。疾いひと結らまふ。向ひきて仲唐涙を咽び。えが今物給
も愧や。某渡唐の勅定を蒙り。其日よも兼て命の無りのと。覺悟
たうら思ひ入る。倭人ある安祿山が奸計を墜入る。雲霧凌る高閣。露
の命を終んと。さまたあぐ。憤怒の一念。あぐ。此土の田をよ。又来る人もあ
あぐ。力ヲ截て。蓋蓋の二巻。我本邦へ渡さん。のと。待ひあつて。御使の
入唐。うま。くも。又あぐ。く。此。は。我。願。り。て。お。の。限。り。を。迷。る。と。又。此。款。ハ
ト。世。の。一。首。御。使。目。出。度。飯。朝。の。日。持。飯。ら。ま。て。勅。撰。の。集。中。へ。も。加。へ。り。て。
身後の本意。此上あり。と。最。末。ま。は。頼。ま。れ。ば。吉。備。公。も。涙。ま。れ。仲。唐。在
唐の留守の間。好根の不義。夫人の自害。所領庄園召上ら。満月流
浪の身とあり。事の始末。演吉。て。彼。一。通。を。と。り。出。し。是。賢。自。心。の
心を養。る。血。を。り。て。書。一。文。あ。る。是。下。が。怨。一。斤。袖。の。一。首。の。秋。も。血。涙

の文字。言合され。父子の愛念。生死路ヲ隔つれ。一。体。の。血。脈。朽。せ。ど
して。不。思。儀。を。巡。り。逢。う。る。其。迄。の。大。慶。ん。と。言。つ。書。簡。を。渡。さ。れ。ば。
仲唐受取。つて。物。を。も。得。じ。む。我。遍。と。あ。く。秋。が。漸。ふ。て。泉。の。如。く。流
る。泪。を。搥。拂。ひ。形。を。正。し。て。P。と。れ。ん。と。鳴。乎。我。あ。る。不。覺。あ。の。愁。著。よ
心。我。惑。か。て。言。べ。た。事。も。も。忘。れ。し。ぬ。扱。も。今。夜。此。外。へ。其。現。し。て。出
る。ん。足。下。も。生。だ。た。大。変。あり。其。子。細。い。今。日。足。下。奈。内。の。あ。ら。は。於。て。諸
御。ら。つ。つ。ひ。の。評。定。よ。前。遣。唐。使。を。殺。害。し。て。此。度。の。遣。唐。使。を。無
事。に。飯。さ。る。却。て。度。を。好。む。に。似。ら。る。且。金。烏。王。免。集。平。度。百。度。の
使。ら。も。他。国。へ。渡。ま。さ。る。品。あ。ら。は。是。又。休。ま。く。辞。し。新。ら。ん。と。あ。る
した手段あり。と。それ。よ。ら。れ。幸。あ。る。我。國。圍。基。の。道。に。あ。る。彼。地。へ。渡
ら。る。と。食。應。の。席。と。是。と。ま。め。吉。備。大。臣。の。首。を。加。る。秋。唐。帝。珍

藏の秘書と渡り勝負し依り賭せん。戯りの様は言する時各口と
 して日本其時名譽の基仙を以て彼が敵手と成りのかる吉備
 が命ハ鳳裏の燈火是最上の妙計んと評定既ふ一変せり。明日あ
 りて世を申出せしものあはれ如何なる返答あはれと思ひし
 難題。吉備公當惑面を見りて進退此窮し。稍あつてりて
 なる深層窮境なる命と秘書と渡りてあらん。熱湯烈火も何
 ぞ。殊更圍基の勝負と申其天体をどう弁えられたり。勝
 べども。されど固辞する時。金鳥玉兎と渡りてあらん。其時死
 りて外道あり。とも死なば道あり。只潔く命を捨て泉下の人
 とあらん。と云ふ。是非も曲也。足下といひ某逆両度の勅使其甲
 斐あ。皆奸計ふ身を果さ命惜む。非ざるも。国の耻辱於奈せ

んと。齒と切らして申され。仲磨近く進もう。左思つて。理あ
 れど。我今業通致以て。足下を護念し。是非勝利を得ざる間。少し
 も心を苦しめ。明日禁庭中。圍基の相手は櫻れ。維列の官人
 玄東と。當時は名高き基仙。然るに彼が妻隆昌女といふ。又一層
 の名人故。明日の勝負は僻良あり。夫玄東が身の大直也。今夜密基
 乃極意を傳授する。幸なき我今足下を伴て。彼ら兩室は誘引
 せん。足下日頃の才智を以て。能く圍基の道理を悟り。明日の賭は
 勝るえ。我又足下の欺身は。漆て業通を以て助言せ。いふある名譽の
 敵もあはれ。負ふといふ。有るむと。いと頼母しく云ふ。吉備公大
 り力をえ。頼て仲磨子伴あり。玄東が家を指く。飛が如く。馳行る。
 此時隆昌女ハ一面の局は。黒白の子と分て。玄東は向ひ。其の

濫觴ハ古往堯帝の治世ハ太子丹朱トPせし性愚ク多ク天下
 を治むべし器量ハ非也と思召も初め御意を練ん為圍碁を被
 けく國家の道を教えよされ其碁局の長一尺二寸あり十二月を(表)横
 横三百六十目。是年一年の日教も。黑白日月を表し。圓ある石の上
 子搖く。陽ハ天を象し。方ある碁局下は静ある地を象し。
 扱黑白共ハ相圍む時。中小両目有發生といひ存せざるを死する云
 是天地世界の中生死然以て一大変ともな故延る渡り切切押續
 等の言ハ戰國を飛ぶ軍の法之如其の理つこと言畢く
 去東ハ白子をとせ隆昌女ハ黒子をとつてたふひハ二ツ打つ隆
 昌女ハ三ツ目を打つ黒子ハ二ツ目破れ大驚く去東ハ向ひ今
 三ツ目の陽教ありて黒子の陰体破る最凶兆あり其故

ハ日本小国なりと我邦より東ありて陽国あり我國大國
 たるも日本より西は當て陰国なり。され今陽の爲陰破る凶
 兆ハ良人の身の上ハ天変させられて且又いも怪しむ。今夜夫婦の
 外ハ無死ハ盤上自然と死氣ありて物の障碍をなせり。除以
 覺東ありて明月の如く余不あり。助言の事願ふ。今夜の碁
 是限るも。流石女の気味よく。碁をおさして休む。其時碁ハ吉
 備ハ仲磨共ハ盤面をお守りて御望しが。聞し小勝隆昌女前
 刻より言乃端見処も。一丈と鴻芦館の客間より。見
 小飯らんとせし其折しも。耳直に響く。曉鐘。敬見見く。切を見
 れば。曉月。遠西窓を照して。残燈光幽。濛朧。して。烟の如く。鴻芦館
 の春の曙。扱ハ一炊の夢なり。つら。己は消ん。も。燈火を。掲げん。

おたあが。何の間より枕頭も持衣の隻袖あつて天の原の歌追憶する
 の夢よりいふる。少くも遠くも。根は旅心を探る。却て満月の
 書簡有るをれば。吉備の深く心は感ず。夢よりいふ。正夢をて。仲
 磨既死まると雖神冥赫々と我を助るる疑ひあつて思ふ。夢
 も思ふれば。殊る。我邦も。聞もむ。ぬ。圍基の道自然と妙如
 り入る。斯く勝利なるのあつ。是皆仲磨の賜ものと。頓と盤
 らひ。嗽を。れ。香を。焼。水。を。捧。ぎ。て。懇。に。仲磨の。冥。を。冬。あ。り。朝。廷
 への。沙。汰。今。や。遅。し。と。待。受。り。ま。し。と。そ。勇。々。と。な。れ

安部仲磨 生死流轉 輪廻物語卷之二終

安部仲磨 生死流轉 輪廻物語卷之二終

